

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：34420

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04126

研究課題名(和文) モビリティとシティズンシップ ウガンダ・アルバート湖岸地域の共生原理

研究課題名(英文) The Creation of Citizenship for Immigrants: A Case Study of a Multi-ethnic Village on Lake Albert in Uganda through the Dwelling Perspective

研究代表者

田原 範子 (Tahara, Noriko)

四天王寺大学・人文社会学部・教授

研究者番号：70310711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)： アルバート湖岸移民社会におけるフィールドワークをとおして、(1) 移民のシティズンシップは経済活動を基盤とする生活の必要と便宜において構築されていること、(2) 移民をささえるネットワークには 祖霊を共有する人びととの間で維持されるもの、居住地の隣人たちとのつながりによって構築されるものがあり、それらが共同体への帰属意識を醸成していることを明らかにした。また、ウガンダが英国保護領となる1894年から1962年独立までのアーカイブワークをとおして(3) アルバート湖岸を含む大湖地域は、モノや情報を通じて緊密につながるグローバル・ヒストリーの一舞台であったことを検証することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国家 - 複数の帰属集団 - 個人の関係に着目し、(1) 経済活動を基盤として、地域や隣人とのミクロな関係のなかでネットワークが生まれ、共同体への帰属意識が生まれ出されること、(2) 祖霊を同じくする人びとの間で共有されるシティズンシップ(本研究でリチュアル・シティズンシップと命名)は、地域の隣人たちと協同する儀礼をとおして、地域社会に緩やかなつながりをもたらすこと明らかにした。移民社会における集団間の紛争解決方法、生活を維持するためのネットワークの構築・維持の方法を解明した本研究は、シティズンシップ研究に学術的意義をもたらし、多民族共生社会を展望する一助になる社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)： This study uses the dwelling perspective to focus on how migrant people can construct cooperation related to subsistence activities in a post-immigration and multi-ethnic village on the eastern side of Lake Albert in Uganda. The study found the following results: (1) Mobility has become a flexible strategy for people to improve their lives, and liberating them from national and ethnic boundaries. (2) Two kinds of networks are observed; one is based on kinship relationships, where individuals share beliefs regarding ancestors and memories of the home land. This type of relationship is referred to as ritual citizenship by the author. The second kind of network is constructed by individuals who live closely together and depend on each other for survival. (3) The Great Lakes region, including the Lake Albert shore, was a part of global history, which is demonstrated by the archives from 1894 to 1962 in the British protected area of Uganda.

研究分野：社会学

キーワード：移民社会 リチュアル・シティズンシップ 共同体への帰属意識 緩やかなつながり グローバル・ヒストリー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アルバート湖岸地域は、ウガンダ共和国・コンゴ民主共和国(以下 DRC)・ルワンダ共和国を出自とする多民族が混交する地域であり、人びとは、植民地下の政策、独立後の内戦と紛争という政治的混乱のなかで、漁労、牧畜、農耕を生業とし「自然」と多様な関係を結びながら、湖岸地域に生活世界を構築してきた。2000 年代に再発見された石油の採掘のため、グローバル企業が参入し、交通網の整備により商品流通経路は変化し、移民の流入は加速している。

調査地域における従来の住民であるニョロ系民族は、DRC からの移民アルル人やルワンダ出自の牧畜民族を受け入れてきた。移民たちは、複数の生活拠点と多重的な帰属によるライフスタイルをとり、民族集団の枠を超えるネットワークを活用している。国籍も生業(漁労・牧畜・農耕)も言葉も異なる多民族で構成されるトランスナショナルな空間において急激な社会変化が進行している。こうした現状を踏まえて、本課題は、人びとのモビリティにかかわる歴史的構造的な文脈を明らかにし、人びとの日常を支えているナショナリティとエスニシティの枠を超えるネットワークを調査し、多民族共生を可能とする共生原理とシティズンシップについて研究することを着想した。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、トランスナショナルな移民の動態、国境を越えて「つながる」ネットワークの活用を明らかにし、モビリティの基底にある社会的政治的なメカニズムを解明すること、そしてそれにより、多民族「共生」を可能とする原理、多様な人びとが共に生活するためのシティズンシップ概念を探求することであった。具体的には、(1)トランスナショナルな移民の動態、(2)国境を越えて「つながる」ネットワークの活用を明らかにし、(3)人間が何らかの共同体や社会に「帰属する」ことの意味をあらためて問い直すことを通して、「共生」のためのシティズンシップの(再)構築の可能性について探求するために、アフリカ大湖地域における移民社会を対象として研究を実施した。

3. 研究の方法

研究の全期間をとおり、フィールドワーク、アーカイブワーク、研究会開催および研究大会での報告を実施した。

(1) フィールドワークの実施

モビリティの社会的背景および人びとが運用・創造するネットワークを明らかにするために、アルバート湖岸の移民社会および出身地域におけるフィールドワークを、研究期間内に断続的に約 8 か月実施した。トランスナショナルな空間において、人びとが創造し、自律的に運用するネットワークについて、参与観察および聞き取り調査を実施し、その背景にある共同性について研究を深めた。

(2) マクロな構造的歴史的な文脈を把握するためのアーカイブワーク

イギリス国立公文書館におけるアーカイブワーク(2017 年、2018 年)を実施し、植民地下にあったウガンダ保護領および大湖地域の状況、人びとの動向にかかわる資料を収集し、人びとのモビリティの歴史的背景について調査を行った。

(3) 移民社会における共生にかかわる理論的研究

シティズンシップにかかわる研究会とシンポジウムを、「アフリカン・シティズンシップの解明：ウガンダ社会の動態とシティズンシップの関連性」(基盤研究(B)、課題番号：16H05664、研究代表者：波佐間逸博)と共同で、国内・ウガンダ共和国カンパラ・南アフリカ共和国ケープタウンで開催し、研究交流をはかった。

4. 研究成果

本研究の主な成果は以下の 4 点である。

(1) トランスナショナルな空間におけるシティズンシップ

アルバート湖岸では、漁労・農耕・牧畜と多様な生業が営まれ、人びとは地縁・血縁・民族による社会関係資本を駆使しながら、共生を実現している。しかし、湖や大地の使用をめぐる争いは絶え間なく続き、多くは村の長老を中心とするローカル法廷にかけられることになる。本研究では、多様なシティズンシップの様態を明らかにするために、具体的な争議へのアプローチをとおり、異なる利害関係をもつ集団がいかに合意に至るのか、人びとは権利と義務にどのように折り合いをつけて共生を実現するのかについて解明を試みた。

調査期間中、漁具の盗難や農耕地への危害などの事件に端を発する争議は、殺人事件へ発展することが数回あった。こうした事件に警察が関与することで、民族間の対立が先鋭化され、ある民族による他の民族の家や所有物の焼き払いなどが引き起こされることになった。こうした問題に対して、ホイマ県は、政府役人が派遣し、新村長選出のために選挙を実施し、新しい執行部を樹立させるといった行政的解決が試みていた。上からの政治的決着が試みられる一方で、日常生活においては、湖の資源(魚と水と大地)をめぐる経済活動を基盤として、人びとは生活を維持し、年単位の時間経過を経て民族間の社会関係を「回復」させていた。

こうした日常空間における共生「回復」の過程において、日常の糧を得るための経済活動によるシティズンシップが発露すると考えられる。それは時として、ナショナリティやエスニシティなどの枠組みを超えて機能している。この研究成果は、シティズンシップ研究における経済活動

の重要性を再確認し、シティズンシップ概念に経済活動の視座を導入することを促した。

(2) 移民をささえる二つのネットワーク

アルバート湖岸地域の移民の政治的権利について、他民族が支配的な地域行政は考慮することを怠ってきた。さらに、トランスナショナルな移民たちは、国家によるセイフティネット（医療、教育、福祉）からも域外に置かれてきた。一方、グローバル化のなかで国家的な漁労政策は世界市場の要請により政策を変更し、その変更は地域行政を通じて漁民たちに通達されてきた。移民である漁民たちは、漁労政策の変化とそのローカルな適用に応じることができず、岸辺の漁村を周遊することで日常生活を維持せざるをえない状況に追いやられている。このように世界市場の魚と石油の影響を受けながらも生活を営む移民たちを支えるネットワークは二つある。

一つは、出身地とのつながりのなかで維持されているネットワークである。移民と出身地のネットワークの構築には、携帯電話による送金システムが重要なファクターになっている。このネットワークは、植民地支配という歴史的な分断を経てもなお、トランスナショナルなネットワークとして継続している。出身地域における死者祈念儀礼の調査をとおして、このネットワークの根幹には祖霊への畏怖と崇拜の念が共有されていることが明らかになった。本研究では、生者だけでなく死者をも含めたシティズンシップ概念として、リチュアル・シティズンシップというゆるやかな概念を提唱することができた。

もう一つは、地域を基盤とする緩やかなつながりによるネットワークである。移民たちは、居住地の同業者や隣人たちとのつながりのなかで、日常生活を営み、そのネットワークを日々更新している。たとえば、ローカルマーケットで売買する同業者間、物品を融通し合う「顔見知り」間で構築するネットワークである。このような地域マーケットにおけるミクロな経済活動を基盤とした緩やかなつながりは、アルバート湖岸の村々で観察できる。さらに、このようなつながりは、湖岸の村と村を緩やかにつなぎ、アルバート湖岸北東部を緩やかにつなぐネットワークを形成している。異なる民族、異なるナショナリティを含むこうしたネットワークを通して、人びとが岸辺の村々を周遊することを可能にする。地域における「顔見知り」「隣人」の存在は、移民たちに「暮らしていけるかも」「働けるかも」という希望をもたらし、その地域への感情的関係を維持する重要なファクターになっている。当該地域における共同体や社会に帰属することの意味は、経済合理性だけではなく、感情的で偶発的な出会いによっても構築されている。

(3) グローバルヒストリーの一端としての大湖地域

英国公文書館において、ウガンダが英国保護領となる 1894 年から 1962 年独立までの公文書を収集した。それらの資料をとおして、明らかになったのは以下の 5 点である。当該地域は、聞き取り調査によれば「村として機能し始めたのは 1960 年代だ」ということであったが、すでに 1900 年代初頭の地図に村名等が記されていた。つまり、保護領下においても漁労活動は統治機構のもとに置かれていたことわかる。その上で、ウガンダ保護領の漁労政策は、他の英国アフリカ植民地との関係で実施されたこと、ローカルな統治機構において漁民と地域行政担当者らのネットワークが存在したこと、1900 年代前半にはアルバート湖では、すでにベルギー領コンゴとの揉め事が発生していたこと、ブティアバからの漁獲輸送ルートが 1900 年代半ばには構築されていたことから、アルバート湖の漁獲に対して市場からの需要があったことが解明された。つまり、20 世紀初頭より、アルバート湖岸を含む大湖地域は、モノや情報を通じて緊密につながるグローバル・ヒストリーの一舞台であったことを明らかにすることができた。

(4) 土地をめぐる慣習地概念の変容

アルバート湖岸では、土地をめぐる裁判が増加している。アルバート湖底の石油は、2010 年代以降、採掘が進められ、道路網が急速に整備され、土地に対する補償が進められた。従来、この地域は、ニョロ系グング人のクランが所有・使用する慣習地であり、移住者たちは、クランによる承認により、土地の使用権を得てきた。つまり、土地は個人的な所有物ではなかった。ところが、補償金を目当てにして、土地を「合法的」に登録し、居住者が知らないうちに賠償金を得る人やグループが現れた。石油会社の補償金が、この地域の土地所有の観念に変更を迫ったのである。裁判をとおして、慣習地をめぐるどのような合意形成がなされるのかは、今後の課題として残されている。

本研究は、国家 - 複数の帰属集団 - 個人の関係に着目して実態を記述することをとおして、シティズンシップに基盤には、経済活動および緩やかなネットワークがあること、それが多民族間の共生を可能にすることを明らかにした。グローバル化のもとで生じるモビリティの基底には、社会的政治的なメカニズムがあり、アフリカ大湖地域の移民たちは自らのネットワークの活用して生活を維持している実態を記述することができた。

日本社会において「多文化共生」をうたう場合、文化や民族という明確な境界をもつ固定的実体を前提として使うことが多い。しかし、アフリカ社会において、民族もまた、人びとが暫定的に創り上げる便宜的な社会集団の一つであり、それは経済状況や居住状況のなかで緩やかに操作されるものであることを本研究は示した。移民社会における集団間の紛争の解決方法、生活を維持するためのネットワークの構築・維持の方法を解明した本研究は、現在、日本社会が問われている多文化共生社会を展望するに一助になると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 田原範子	4. 巻 6
2. 論文標題 病気をめぐるレジリエンス ガーナ・アサンテのアスラムという病気を事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 多文化社会研究	6. 最初と最後の頁 295-316
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田原範子	4. 巻 83-2
2. 論文標題 死者祈念儀礼をとおして生起する共同性 ウガンダ共和国のアルル人におけるリチュアル・シティズンシップ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 233-255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Noriko Tahara	4. 巻 56
2. 論文標題 Mobility as Emancipation: Viewing People on the Move in Uganda through the Dwelling Perspective	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 African Study Monographs	6. 最初と最後の頁 53-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田原範子	4. 巻 12
2. 論文標題 療養所も人間の生きる社会：滝田十和男さんのライフヒストリー（1）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 四天王寺大学大学院研究論集	6. 最初と最後の頁 49-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田原範子	4. 巻 62
2. 論文標題 ハンセン病の現在 新聞記事データベースを利用した内容分析	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 四天王寺大学紀要	6. 最初と最後の頁 397-425
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Noriko Tahara	4. 巻 63
2. 論文標題 Alternation of Munziri Light Fishing in Lake Albert, Uganda: From Livelihood to Labour	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Bulletin of Shitennoji University	6. 最初と最後の頁 393-409
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田原範子	4. 巻 1
2. 論文標題 国際社会学 トランスナショナルな想像力を鍛えよう	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大関雅弘編 『現代社会への多様な眼差し』	6. 最初と最後の頁 2 1 3 - 2 3 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 田原範子
2. 発表標題 ウガンダ・西ナイル地域・アルル人における死と儀礼 リチュアル・シティズンシップの可能性
3. 学会等名 長崎大学多文化社会学部シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noriko Tahara
2. 発表標題 Resilience on Healing: A Case Study of the Asante in Ghana
3. 学会等名 Human Resilience in the face of man-made and natural disaster in Japan and South Africa: Ethnographic Perspective (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田原範子
2. 発表標題 隔離を超えるモビリティ 逃亡・脱走、旅、文芸活動
3. 学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Noriko Tahara
2. 発表標題 Cooperativeness arising through memorial rituals for the dead: ritual citizenship among the Alur of the Republic of Uganda
3. 学会等名 Citizenship in the 21st Century: South Africa and Japan Writing Workshop (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Noriko Tahara
2. 発表標題 The Creation of Mobility: Viewing People on the Move in Uganda through the 'Taskscape Perspective'
3. 学会等名 CASCA/IUAES2017 A Joint CASCA/IUAES Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Noriko Tahara
2. 発表標題 Rethinking of the Citizenship over the Nationality: Who can Perform the Ritual Rite 'Myel Agwara'
3. 学会等名 Uganda and Japan Joint International Workshop in Kampala (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Noriko Tahara
2. 発表標題 Citizenship of Un-counted People in a Multi-Ethnic and Trans-National Community along the Shore of Lake Albert in Uganda
3. 学会等名 平成29年度～30年度二国間交流事業、南アフリカ (NRF) ケープタウン大学と長崎大学との共同研究 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Noriko Tahara
2. 発表標題 The Creation of Mobility: Viewing People on the Move in Uganda through the 'Taskscape Perspective'
3. 学会等名 6th African Potential Forum (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 中村亮、今井一郎、田原範子、田村卓也、古澤礼太、伊藤千尋、藤本麻里子、大石高典、萩原幹子、山田孝子、中川千草	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 304
3. 書名 アフリカ漁民文化論 水域環境保全の視座	

1. 著者名 Anye-Nkwenti Nyamnjoh, Claire-Anne Lester, Ayanda Manqoyi, Tamara Enomoto, Itsuhiro Hazama, Kiyoshi Umeya, Toshiki Tsuchitori, Noriko Tahara, Gaku Moriguchi, Olivia Joanes, Kongo Minga Mbwech, Zuziwe Nokwanda Msomi, Msakha Mona, Marlon Swai, Harry Garuba, Francis B. Nyamnjoh	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Langaa RPCIG	5. 総ページ数 416
3. 書名 Citizenship in Motion: South Africa and Japanese scholars in conversation	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Uganda Book http://uganda.sakura.ne.jp/book/index.html
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考